

林産試験場が製作した 南極観測第1次越冬隊用の犬そり（後編）

企業支援部 普及調整グループ 渡辺誠二

前号では、林産試験場（以下、林産試）が南極観測越冬隊用の犬そりを製作した経緯と、使用後の犬そりが国立極地研究所（以下、極地研）に残っていたことをご紹介します。以下、前号に引き続き、林産試に所蔵する犬そり関連のお話をご紹介します。

■ 稚内にも残っていたもう一つの犬そり

極地研を訪問して、思わぬ収穫がありました。訪問した時に極地研の広報の方にお話を伺うと、南極で使用したそりが「稚内市青少年科学館」にあるはずだと言うのです。稚内は第1次観測隊派遣に向け、稚内公園に樺太犬訓練所を設けて犬そりの訓練を行った地です。そこで、稚内を訪れてみました。

すると、写真1のそりがありました。写真2のとおりランナーとロングチューディナルは集成材で造ら

れ、ランナー幅を測定してみると8.5cm、また、写真3のとおりランナーにはスカーフジョイントでつなぎ合せたような跡が確認できました。このそりもまぎれもなく林業指導所で製作した大型そりと思われる



写真3 ランナーの接合部と思われる箇所の破損状況

ただ、写真4に写っているとおり、このそりの束材は7本となっており、木材と鋼材が交互に使われています。文献にある大型そりの束材は5本で、すべて木材となっているので、この点において稚内に現存しているこのそりは大きく異なっていました。



写真4 鉄と木材が使われている束材

■ 林産試に所蔵のそりはいかなるものか？

当時の林業指導所の文献では、所蔵している小型のそりに関する記述がなかったため、当時そりの製作に携わっていた林産試のOBに直接話を聞くことにしました。文献1～3を書かれた高見氏はすでにご逝去されていましたが、そりの製作や試験を補佐していた方がまだお元気で話を聞くことができました。



写真1 稚内市青少年科学館に残されている犬そり



写真2 ラミナを接着して造られた部材

かれこれ60年も前の話で、記憶を辿っていただくのも恐縮でしたが、その中のお一人から、小型のそりを製作し南極観測隊に引き渡したことを伺い、当場の資料にはありませんが、大型、中型以外に小型のそりも林業指導所で確かに造っていたことが分かりました。

■文献にあった同型のそりの発見

また、並行して極地関係の文献を調べていると、犬飼哲夫氏と芳賀良一氏が書かれた「日本南極地域観測隊犬橈関係報告(Ⅱ)」⁴⁾に突き当たりました。この報告は、犬そりに関して犬および装備、運用のすべてについて詳細に記述したもので、この中のp.42に、「小型犬ソリ」の記述があったのです。ここに記述されている小型そりは図3のとおりで、ランナー幅は6.0cm、全長2m、束材の本数は3本と記載されています。林産試に所蔵のそりも、ランナー幅は6.0cm、束材が3本です。全長こそ約2.5mで文献にある2.0mと異なり、また前方のハンドルパーもありませんが、基本構造は文献と同じです。「第1次南極地域観測輸送実施経過報告書」⁵⁾の中にも、小型そり4台を輸送していることが書かれているので、このタイプの小型そりも南極に持って行っているのは確かと思われる。

次に確認することは、林産試に所蔵のそりが南極で実際に使われたものかどうかということです。

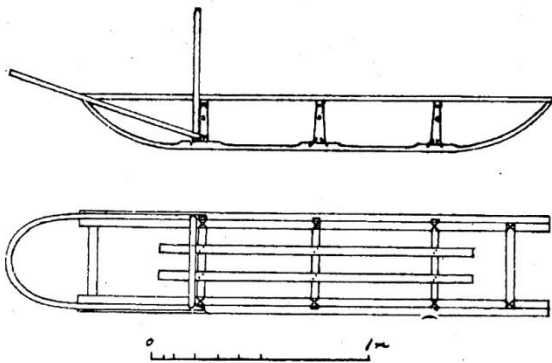


図3 「日本南極地域観測隊犬橈関係報告(Ⅱ)」にある「小型犬ソリ」⁴⁾

■南極へは持って行っていない

昭和33年(1958年)6月24日に当時の皇太子殿下(現在の今上天皇)が林業指導所を御来所になっており、この報告が同年7月発行の林業指導所月報⁶⁾に掲載されています。この中で殿下が南極観測用の犬そりを御覧になっている写真が載っています。白黒

の写真ですが、写真の中に写し出されているそりは、現在林産試に所蔵のそりと同型のもので、所蔵のそりそのものが写っていると思われます。

南極観測隊は、昭和32年2月より第1次越冬隊が越冬を開始し、翌昭和33年2月24日には、観測船「宗谷」が氷塊に阻まれ航海不能の危機にあったため、第2次越冬隊が越冬を断念し、犬たちも含め昭和基地のほとんどの物を残して観測隊は離極しました。そして、翌34年1月に第3次隊が再び南極を訪れ、タロとジロの生存を確認するとともに2月から観測が再開されたのです。

皇太子殿下が御来所された昭和33年6月時点では、南極観測隊において、そりを含む機材はまだ南極に残されたままでした。林業指導所において、この時期にすでにそりがあったということは、このそりは南極には持って行っていないということです。そのため、林産試に所蔵のそりは、南極では使っていないと断定してよさそうです。

■稚内-旭川間犬そり踏破で使用した可能性

また、「日本南極地域観測隊犬橈関係報告(Ⅱ)」⁴⁾(p.52-54)によれば、昭和32年2月21日から3月3日の11日間にわたり、第2次観測隊の冬期総合訓練として、稚内から旭川まで犬そりで踏破しています。この時は大型そりと小型そりを使用していました。この訓練のゴール地点が、当時の林業指導所からあまり遠くない旭川自衛隊前となっていたので、林産試に所蔵そりはこの時に使用したそりの可能性はないかと考え、調べてみました。調べるにしても、南極観測隊の当時の関係者に聞く以外にはありません。

そこで、この冬期総合訓練に参加し、その後南極観測越冬隊に参加された安藤久男氏、木崎甲子郎氏、吉田栄夫氏に直接または間接にお話をお聞きしました。しかし、残念ながら分からないとお話で、結果的には、この稚内-旭川冬期総合訓練に使用したものと判断できませんでした。

■結論は展示用に造られた同型のそり

林産試に所蔵の犬そりの資料的価値を確保するため、今回調べて得られた情報は以上で、これらの情報を総合すると、林産試に現存するそりは、南極1次観測隊で使用した小型そりと同型のもので、展示用に残されたものと結論付けるのが一番妥当と考えられます。実際に使われたものではないと思われます

が、南極観測の初期の調査手段を物語る歴史的資料として、価値あるものに代わりないでしょう。

■おわりに

昭和20年に敗戦し復興の抛りどころを探していた日本は、南極観測を国際協力で実施している先進国に遅れまいとして、10年後の昭和30年11月に南極観測隊派遣を決定し、わずか1年の準備期間だけで翌31年11月に第1次隊を派遣しました。この南極観測隊派遣は、まさに敗戦の国民意識を払拭するための失敗の許されない国家的プロジェクトだったようです。

木材産業の興隆を通して国民生活に寄与するため、昭和25年に開設された林業指導所（林産試の前身）も、新しい日本のため職員が情熱をもって試験研究に取り組んでいたと感じられます。そして、その情熱が、製作期間が半年もない短期間で犬そりの製作を完成させ、国家プロジェクトの南極観測第1次越冬を間接的に成功に導きました。

製作過程では幾多の困難があったことと思われます。これを克服した林産試験場の先人の情熱と奮闘に対して、心から敬意を表したいと思います。

（追記）

1) このたび愛媛県総合科学博物館の依頼により、平成25年7月から9月に同館で開催された特別展「南極の自然 ～研究者による観測活動とその成果～」に、林産試所蔵のこの犬そりが展示されました。この特別展には35,346人の来場があり、多くの方の目に触れるところとなりました。

2) 文献7によると、犬そりは、第1次越冬隊用に大型5台、中型4台、小型4台を持って行きましたが、観測船「宗谷」から基地までの運搬のため一時的に定着氷の上に置いておいたものが、定着氷ごと海の彼方へ流出してしまい、最終的には、大型3台、小型1台のみが残ったとのこと。第1次隊は、この少数のそりで越冬しました。このため、越冬隊はそのデータがとれず、使用後のそりの情報が林業指導所に入ってこず、その後の林業指導所の文献に報告がなされなかったのだと思われます。

■参考文献

- 1) 高見勇：“南極観測用犬橇の試作について（1）：集成木材による試作の概要”，林業指導所月報，56号，p. 1-4，1956年。
- 2) 高見勇：“南極観測用犬橇の試作について：集成材による”，木材工業，12巻1号，p. 21-24，1957年。
- 3) 高見勇：“集成材に関する研究（第4報）：南極観測用犬橇材の耐寒性について（1）”，林業指導所研究報告，12号，p. 23-31，1958年。
- 4) 犬飼哲夫，芳賀良一：“日本南極地域観測隊犬橇関係報告(II)”，南極資料，No. 10，p. 38-60，1960年。
- 5) “第1次南極地域観測輸送実施経過報告書”，海上保安庁巡視船宗谷，海上保安庁発行，1958年。
- 6) “皇太子殿下をお迎えして”，林業指導所月報，78号，p. 1-2，1958年。
- 7) “南極の犬ぞり”，菊池徹，法政大学出版社，1959年11月。